

堀辰雄・Geneviève・モダンガール

—物語の女たちとその時代—

飯 島 洋

1.

堀辰雄にとっての初めての歴史小説となった「かげろふの日記」には、初出(「改造」一九三九・十二)の段階では、それが「数年前に亡くなりました母が残して行つた」「手帳」であるとして、名を明かさない「無名の女」から作者への手紙が冒頭に置かれている。この手紙の主は、「古い日記に托してなりと、せめて御自分を生かさうとなされた母のお気持もよく御わかり下されるかとも思はれ」、「ずみぶん躊躇いたして」いたが「思い切つて」この手帳を送るという。「あなた様だけがお読み下さるのも宜しいのでございます」というところからは、「手帳」が作家をとおして公開されることを期待しているとも読み取れる。

理想的人物と思って結婚した夫の俗物性に苦しめられる妻の半生を綴った André Gide の *L'école des femmes*(NRF,1929)の冒頭には、亡くなった母の手記を作者のもとに送るという娘 Geneviève の手紙が置かれている。*L'école des femmes* の場合も *permettez-moi de ne pas signer cette lettre de mon vrai nom*「本名を記さないことをお許してください」*Après bien des hésitations, je me décide à vous envoyer ces cahiers*「長い躊躇いの後、私はこのノートをあなたに送る決心をしました」*Je vous laisse libre de publier ces pages*「出版してかまわない」とあり、この設定を堀が利用したといえる。

初出「かげろふの日記」に先行する菜穂子物は「物語の女」のみで、この時点では母・三村夫人の死は作品に表れていないが、「無名の女」とその母は、

山本裕一も指摘するように「菜穂子」における菜穂子およびその母と重なり合う¹。「愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつづけ、その求むべからざるを知るに及んでは、せめて自分そのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分からせようとし、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めるに至る、不幸な女の日記」である「かげろふの日記」に自己を仮託することは、「ロマネスクな気もち」²に苦しむ女性らしい振る舞いであった。その手記を作家に送る娘にとっても、母の「ロマネスク」な心性が自己に無縁なものとして切り捨てることのできないものだったからこそ、その生の評価を作家に委ねようとしたといえよう。

「無名の女」の手紙は単行本化に際して削除された。「かげろふの日記」は純然たる歴史小説として読むことを要請される。しかしながら、*L'école des femmes* の設定を援用したことから窺えるように、男性との愛という問題が、心理劇であるよりも愛に依存する生を問う生き方の問題として焦点化されたことは重要である。「物語の女」から「菜穂子」への改稿も、心理から生への主題の深化として理解するべきである。

2.

「菜穂子」創作ノートには、「菜穂子」と頭書した上で、シャルドンヌ Jacques Chardonne の「祝婚歌」*L'Épithalame*(Librairie Stock,1921)の引用が書き込まれている³。

Il faut se jeter dans les expériences nouvelles.Elles nous révèlent souvent notre véritable personnalité.

新しい経験の中に身を投げ出さねばならない。彼女たちは私たちにしばしば、真の個性というものを示してくれる。

ただしノートでは、保守的な両親に反撥する娘ジュヌヴィエーヴの手記という形をとった、Gide の *Geneviève*(Gallimard,1936 邦題「未完の告白」)の表題が冠せられている。*L'école des femmes*、それに対する父の反論「ロベール

ル」*Robert* (NRF,1930)に続く三部作の最終作である。

L'école des femmes で主人公ジュヌヴィエーヴは結婚観をめぐる母との論争の中で

elle ne pouvait admettre le mariage s'il devait conférer au mari des prérogatives;que, pour sa part, elle n'accepterait jamais de s'y soumettre

夫に対して特権を認めなければならないのなら、結婚を受け入れることはできない。自分としては、絶対に夫に服従することは受け入れないと主張する。母は娘が自分を見失っていると考え、親子の深い断絶を痛感する。さらにジュヌヴィエーヴは

Ta vertu est à toi ; je ne supporte pas de me sentir engagée par elle

お母様の美德はお母様のものよ。それに私が縛られるのは耐えられない

と言う。彼女は一個の独立した、自由を持った女性として他者からの束縛を拒否して生きようと願う。これが、俗物の夫に苦悩しつつも結局は貞淑に行動してきた母を絶望させる。母娘の対立、結婚観の相違という点では、「菜穂子」形成にこの作品が大きく影響したことは間違いない。創作ノートの書き込みは、結婚や家庭に安住するだけでは見出されない、人間としての女性の生への関心を示している。

ジュヌヴィエーヴは、夫の俗物性に苦しめられながらも結局は自立的な生を生きることのできなかつた母に対して批判的であった。*Geneviève* の引用から窺えるように、彼女は主体的な生を選択しようとする新時代の女性と考えることができる。果たして菜穂子はジュヌヴィエーヴのような主体的な生への希求を持っているのだろうか。

菜穂子のように、結婚生活に幻想を抱かない姿勢は、先行作品に登場する女性像に既に示されている。「山茶花など」(1938.1「新女苑」)で、主人公「私」は「もう人生の傷といふ傷を受けてしまったやうな気もちになつて」いる女性に対し、「人生の一步手前にゐるうちから人生の何もかもが分つてしまつてゐるやうな気もちになつてみた」「一人の若い女」のことを話す。その女性はずまらない男と結婚し、無理な妊娠によって亡くなっていた。この「若い女」

の考え方は、「自分で自分のことがよく分かっています」といい「幸福なんていふ幻影」に囚われることを批判した菜穂子に引き継がれている。先行作品の表現を補助線とすると、菜穂子は人生に参画する前に生の本質をわかってしまったような気持ちになっていると捉えることができる。

自分の人生に過度の期待を抱かない醒めた思念は、ジュヌヴィエーヴの場合は社会通念への批判的な眼差しと一体のものであった。堀の描く世界は社会の現実からは遠く離れている印象を持たれがちだが、菜穂子も堀固有の観念の中でのみ生きる存在なのであろうか。単に女性としてだけでなく、人間らしく生きるということの内容、そして現実の女性の生き方に関する認識を、「菜穂子」が描かれた時代、および菜穂子が結婚生活をめぐら問題に直面した時代のさまざまな文献を資料に具体的に明らかにし、菜穂子に当てはめうるものを探ることに意味があるのではないか。堀辰雄の虚構が、同時代の現実においてどのような位置を占めうるかを考察する。

3.

結婚生活に余り期待しない、夢よりも理性を重視すると言う発想は、1930年代後半の女性たちの言説においてしばしば語られる。1936年6月号「婦人公論」に掲載された、「私は何故結婚しないか 結婚の悩みを語る座談会」では、次のようなやりとりがされている。因みに会の冒頭で記者が「知識階級の女の方」がなかなか結婚しないについて当事者の話を聞く旨を述べている。それに相応して、日本画家津田青楓の娘で「仏英和高女卒」津田あやめ、評論家新居格の娘で「文化学院卒」新居好子など、所謂「口に糊する」ために働かねばならない多くの女性たちとは一線を画した階層の婦人が参加者となっている。

津田「(略)戸川さんでしたつけね。言つてらしたでせう、理性がかちすぎてだんだんいろんなことを考へてきちやふから無造作に恋愛に飛び込んでゆけないんだつて。」(略)記者「わたしたちが女学校を出るころはね、ちやうど結婚適齢期ね、あのころはわりに世間一般、思想的にもまじめだつたでせう。わたしたちもいろいろまじめにものを考へてたで

せう、ところで今は急激に変ってきましたね。人生に対して虚無的とでもいひませうか。」

ここで挙げられた「戸川さん」というのは、戸川エマを指しており、彼女は1936年1月22日付「読売新聞」の「現代娘かたぎ」という欄で、

「若しこの人と結婚したら(略)果たして一生を幸福に過ごせるだらうか?」といふ問題を先づ第一に考へますのね。そして若し「否」といふ結論に達したら、どんなに恋してゐても、理性の方で抑えてしまいます。」と語っている。

男性の視点の加わった主張も拾ってみよう。「菜穂子」の雑誌発表も近づいた一九四〇年五月「新女苑」に、当時流行作家となっていた石川達三を交えての座談会「近代女性の性格」が掲載された。そこで石川は若い女性の本来の姿を「非常に感傷性の強い時代がある」と規定した上で、「近頃、さういふ感傷の時代を経過しないで育つて来た女の人」が出現していると述べている。

こうした記述によると、戦前期、一定水準の教育を受けた女性たちの少なからぬ層が、現実的、理性的に男女関係について思い巡らし、結婚によって必ずしも幸せになれるとは限らないと判断し、恋愛や結婚にためらいを持っていたと考えられる。それは「虚無的」という形容をされるまでに現実を醒めた眼で見つめるまでに至ることもあったようだ。

では、彼女たち新時代の女性にとっての理想的な結婚生活はどのようなものだったのか。「近代女性の性格」では、結婚すると女性は男性に頼るようになるという石川の見解を受け出席女性から次のような発言が出る。

仕事関係のことではなくて、精神的にあくまでも協力的立場で生活を築き上げてゆきたい。さうしてそれが自分たちの結婚に受け入れたいものだといふ気持で私達は結婚するのです。

彼女たちの一世代上の女性たちも、自己の精神を男性と対等のものと認められたいと苦悩していた。1930年代後半の言論を引く。

結婚と同時に精神的生活の生長を中止して、ただ家庭のよい機械になり下つてそれでどうして真実の良妻になれませう。

(「妻の成長」茅野雅子 「読売新聞」1936.1.23)

これらの論文からは、単に職業を獲得し社会に進出したり、男性と同じように銀座などを闊歩したりするのではなく、結婚して家庭に入った後、人間らしい精神的存在として向上してゆきたいと言う願いを孕んでいたことがわかる。

婚期を迎えた女性にとって、悩みは必ずしも結婚後も仕事を続けられるか、仕事を通しての自己実現・自己表現が可能かではなく、家庭の中で、夫と対等に協力しながら生活を営みたい、然し現実にはその願望が叶えられる可能性は高くない、というところにあった。

女性の人生観が現実的なものになってきたのが最近の現象と認識されていたとなると、従来若い女性はどうのような内面を持つと考えられていたのであろうか。女性解放活動家の山川菊栄は「卒業を前にする少女たち」(「婦人公論」1938.2)で「自活の能力も得、眼界も広め、判断力を練ることは、今の若い女性に共通の欠点である余りにデリケートなひ弱い神経と過度のセンチメンタリズムとを清算」してくれ、これは「家庭を維持して行く上にも必要な資格である。」といている。山川の文章を読むと、同時代の若い女性の発言と対立する判断のようにも見える。しかし、座談会に参加している女性たちの発想を、理想と現実の隔たりに躊躇し、厳しい現実に積極的に立ち向かうことに怯んでいると解釈すれば、現実を醒めた眼でみてはいても、それを受け入れられずにいる彼女たちを、「デリケート」で「センチメンタリズム」に溺れていると看做しても矛盾は無いかもしれない。つまり彼女たちの「現実的」というのは、認識の段階にとどまり、困難を覚悟の上での実践にはなかなか踏み込めないという条件付きのものだった。結婚への躊躇いは、現実の厳しさに身を投げ出すことを恐れてのモラトリアムといえよう。

こうした言説の中に菜穂子を置くと、彼女は、1930年代の多くの知識層の女性と同じように、結婚しても対等な人間同士として夫と協力して家庭を築いていくことは難しいという認識を持ちながら、いつまでも躊躇いを抱いて実家にとどまらず、結婚に踏み出した点で、感傷性に流されることなく、決然とした姿勢で現実を受け入れたと評価することもできる。

4.

これまでは主に「菜穂子」発表に近い時代の言説と比較することで、同時代における菜穂子の位置づけを試みた。ところで「菜穂子」の作品世界そのものは、そこから十年ほど遡った、1930年頃の出来事となる。この時代において、菜穂子の選択した生き方はどのようなものと解されるかを考えてみる。

菜穂子の結婚相手は、「彼女より十も年上で、高商出身の、或商事会社に勤務してゐる、世間並に出来上つた男」と表現される。彼は「菜穂子の昔を知つてゐる友達たちは、なぜ彼女が結婚の相手にそんな世間並の男を選んだのか、皆不思議がつた」ような凡庸な男であった。

当時、新しい女性像として世の注目を浴びていたのは「モダンガール」の生き方であった。洋装や断髪など、革新的な外面を装い、伝統的価値観に逆らつた自由な生き方を選んだ彼女たちは、中傷を含め批判的に語られることが多かつた。一方で、浮薄な流行の波に乗ることとは違う真のモダンガール像を論じたり、彼女たちの登場を女性の覚醒として冷静に受け止めようとしていたりする批評もあつた。

片岡鉄平は、『モダンガールの研究』(1927.6 金星堂)で、「彼女は、現実的であると云ふ女性本質を確実に把握して、生活を科学的に合理化して行かうとする。」と述べている。また石黒暁美も『モダンガール物語』(1930.9 四六書院)で、「自由で、聡明で、文化の洗礼を受け、現実的で、凡ゆる古き型に抗して進まむとする」という。時として奇矯に走る外面的な現象とは切り離して、現実・生活に対する新しい女性たちの知的で合理的な態度を捉えた評価である。

モダンガールと軽佻浮薄な流行に乗った外貌だけを装うものと、精神的に従来の女性のあり方を革新したものとに分類し、後者を肯定してその精神的な成長を願うという意味での新しい女性の生を求める思想は、1920年代後半に主張されていた。たとえば平塚らいてうは、「かくあるべきモダンガール」(「婦人公論」1927.6)で、「ほんもののモダンガール」は「女性もまた人間であると叫んで、女性である個人の尊厳、個性の自由を主張」してきた女性で

あり、「人間全体として既成的な見方や考へ方や感じ方や行ひ方から脱して自分自身の自然さ、自由さをとり戻して」いるという。小寺菊子も「真のモダンガール賛美」(同)で、「近代の女性は人生観が批判的にもなつてゐるし、内容的に充実した生活に憧憬を持つやうになつてゐることは事実」と述べている。精神的に既成概念の枠の内部で自足せず、自意識を持って、主体的、批判的に自己の人生や社会について考える姿勢を持ち、それによって人間としての尊厳を実現しようとしている、という意味でなら「モダンガール」を積極的に評価する動きもあった。小寺は一方で「自分といふものをしっかりと掴むことも出来ないでそこいらに彷徨してゐるところの未完成の若い女性たち」を弁護するために発言するということを述べており、人間の内面的充実に目覚めた女性は、いまだその完成には到達せず、人生に迷っているという認識を示している。

菜穂子は奇抜な装いも振る舞いもせず、享楽に耽つてもいない。しかし幸福という幻想に囚われずに結婚を選んだところに、「センチメント」から脱却した「現実的」な女性をみることができよう。幸福を「幻影」を呼ぶところからは、諦観的な女性像を連想させるが、「自分の新しい道を伐り拓こうとして努力してゐる」と自己の結婚について述べている菜穂子は、「ロマネスク」とは切れた地点での生の確立を模索していたと考えられる。

1920年代末から1930年代後期の女性の生き方の問題と向かい合ってきた読者にとって、菜穂子の結末はどのように映るだろうか。菜穂子の結論は、自分の行動に夫がどう向かいあったかが問題なのではなく、「何物かに魅せられたやうに夢中になつて」行動しているうちに、「幾つかの人生の断面が」「自分に新しい人生の道をそれとなく指し示してゐて呉れる」というように、逡巡せずに行動することが重要だというものだった。知的・合理的に物事を捉える視点を持ち、その洞察ゆえに人生に参画する前に人生はかくたるものと決め付けてしまった女性が、改めて人生を生きようとし始める物語として、「菜穂子」は読むことができよう。菜穂子が作品終結部で獲得した思念は、知識的、虚無的で行動する前に何もかもがわかった気持ちになってしまう当代の女性に対するアンチテーゼとなろう。

Gide の *Geneviève* は「菜穂子」の作品構成には一定の影響を与えたことは間違いない⁴。そして主人公の行為面を比較する限り、菜穂子が非行動的な抽象的人物で、結局〈堀辰雄らしい〉という評価に落ち着かざるを得なくなる。しかしながら、*Geneviève* が社会に対して行動的に反抗したのに対し、菜穂子の思弁的性質に注目するならば、戦前昭和期の女性の状況を理解したうえで、如何なる生を生きるべきかという理念について可能な限り思索した人間として評価することができるのではないか。

終わりに

1941年という時は、日本は既に日中戦争の泥沼にはまり込み、対米開戦を目睫の間に控えた、「非常時」の只中であつた。その中で、菜穂子のような発想をするということの持つ意味を最後に考えてみたい。

「女よ家庭に帰れ」といふ声が、新たに叫ばれはじめた。国策上、重要な意味をもつた警鐘と思ふ。

(「女性の天地」 横山美智子 「読売新聞」1939.10.23)

このような主張をした横山は、翌年には次のような記事を載せている。

生活闘争の中に自己を磨き上げて行く男性の道に同行して家庭の整備の中に繊細新鮮高邁な智恵の光をとらへて自己をきづいて行く希望からのみ、家庭らしい家庭が生まれる

(「花嫁の希望」 「読売新聞」1940.2.14)

こう述べる横山の視野には、時局に対応し男性たちが出征、徴用に動員される一方、銃後の守りという形で国家の意思に参画するという女性の「社会参加」が描かれていたと考えられる。

夫婦愛は、1940年前後にはもはや、純粹に一對の男女二人の間の内面的問題ではなくなっていた。女の情念を自在に描いた岡本かの子でさえ、次のように述べている。

夫婦を、個人の男と女の向ひ合ひとして、愛情幾匁(略)と、まるでカクテルを作るやうな算盤珠で計つた時代は過ぎた。夫婦は一体、それを籠めたる家族は一体、それを籠めての国民は一体と、かういふふう

事、有機的生命網の連繫を確と心に弁へて、国家の意思目的に率先団結して行かねば、世界に後れをとる時代となつた。

(「夫婦愛の再検討」 「読売新聞」1938.1.10)

「菜穂子」の作品世界が「モダンガール」の闊歩する時代とはいえ、それが読まれる現実の社会は太平洋戦争前夜である。この時期に、内面的な自由を保持した女性像を堀は追究したのである。

「菜穂子」は1930年代の女性の悩みを持った主人公の物語として読むことが可能だが、同時にまた、菜穂子は1940年前後の時代を超越した存在でもあったといえよう。

- 1 堀辰雄「かげろふの日記」小論—他者の自覚(「別府大学国語国文学」46号2004)
- 2 鎌倉文庫版『菜穂子』(1946・10)あとがき
- 3 「菜穂子」とL'Epithalameの関係についての考察には、影山恒男『『菜穂子』をめぐって ロマネスクと現実のヴィジョン』(「文学」14巻5号2013)がある。
- 4 西村靖敬「堀辰雄『菜穂子』とアンドレ・ジッドの三部作」(「比較文学」40号1998)